

〔書評〕

岡田莊司著

『古代天皇と神祇の祭祀体系』

斎藤英喜

本書は岡田莊司の古代祭祀研究を集大成した一書だ。われわれは序章（付論）、終章をほさんだ第一部「古代神祇祭祀の基本体系」、第二部「杵築大社と宇佐八幡、祭祀制の展開」の二部全一四章で構成された本書によって、岡田祭祀学の達成と全容を知ることができるのである。

ところで「岡田莊司」といえば、平成度の大嘗祭に際して、定説として流布していた折口信夫の大嘗祭論・天皇靈論を、史料的な根拠のない「虚妄の説」と全面的に批判した学者として知られている。その成果は二〇一九年刊行の『大嘗祭と古代の祭祀』（一九九〇年刊行『大嘗の祭り』の増補版）で知ることができ、もちろん本書にも、大嘗祭をめぐる議論は不可欠だ（第一部第六章など）。しかし岡田祭祀学の肝要はそれだけ

ではなかった。

あらためて、岡田は一九九四年刊行の『平安時代の国家と祭祀』で、自らの研究姿勢、方法について、こう述べている。「従来の隔離された特殊史としての狭義の神道史ではなく、国家史の展開の中にも位置づけられる広義の神道史を論じることである」（250頁）。すなわち神道史・祭祀史研究は、国家史研究と不可分にあるという方法的認識である。それは岡田祭祀学（神道史研究）が、国家史をめぐる戦後歴史学（古典的マルクス主義史学）の動向とつねに向き合い、格闘することで構築されてきたことを意味しよう。

端的にそれを示すのが、六〇年〜七〇年代の古代祭祀史研究を牽引した岡田精司にたいする批判的検証である。本書の基調となる第一部第一章「古代の神祇祭祀体系」に、次のようにある。

天皇が直接の祭祀を執り行えたのは、皇祖天照大神一神のみで、それ以外の神々に対しては、地域・氏族による個別祭祀権は残りつづけ、天皇は間接的に関与するのみであった。（中略）古代の律令国家は令制以前の氏族制と七世紀後半以後の律令制とが共存した二元的体制が維持されて

いったが、天皇統治の国家体制である祭祀制においても、地方・地域祭祀権と天皇祭祀権とは二重構造にあり、旧体制を温存し緩やかな包括をしていくことで、天皇祭祀による天下統治を完成することができた。(24～25頁)

ここに論述された「地方・地域祭祀権と天皇祭祀権とは二重構造にあり…」という視点は、岡田精司の「宗教統制イデオロギー論」(11頁)、すなわち律令国家の成立によって地方豪族による人民支配は否定され、地方の神々の祭祀権はすべて最高司祭者たる天皇に集中・独占されたという学説への批判から導かれたのである。戦後歴史学が戦前の講座派理論から継承した「絶対主義的天皇制・専制君主論」への批判といってもよい。それは『常陸国風土記』の夜刀神伝承が語る箭括麻多智による地域神祭祀と天皇祭祀権の代行者・壬生連麿との二重構造、あるいは『記』『紀』三輪山祭祀伝承における大田田根子の神主選定から、「天皇直接の祭祀(親祭)は認められず、地域・氏族祭祀に介入できない原則」(25頁)が確立したというように、古代資料のあらたな読み解きから明らかにされるのである。

その視点は古代にのみ留まらない。「地方・地域祭祀権と天皇祭祀権の二重構造」の議論は、諸国における天皇祭祀権の代

行としての「国司祭祀」、東国における「鎌倉殿將軍祭祀」、近世の幕府の將軍祭祀も「天皇祭祀権の一部委託」にほかならないこと、そして祭祀権が完全に天皇に一元化されるのは、明治四年(一八七二)の「神社は國家の宗祀」とされた以降(25頁)というように、列島社会を貫く國家史と不可分にあることを教えてくれる。ここに「國家史の展開の中にも位置づけられる」岡田祭祀学的方法的立ち位置が見てとれよう。

次に注目すべきは、神道史・祭祀史と國家史とを繋ぐ「崇り神」への視点である。天皇の身体の災厄を占う「御体御卜」儀礼を検証していくことで、伊勢のアマテラスを筆頭に諸國の神々が天皇に崇るといふ実態を明らかにする。そこから「天皇と神々の循環型祭祀体系」(第一部第四章)が導かれる。

卜占は國家神的性格の神々をはじめ、地方・地域の神々に至るまで、崇りの原因を特定できる機能をもった。このもとの、神々と天皇と神職との間は、直接・循環した緊張関係が維持された。諸國の神祇が直接天皇へ崇るといふ事態は、国ごとに国司委任の国内祭祀体制が形成される契機となり、地方の国司へ対して神祇の管理を徹底していくことが要請され、神社の修造、神職の管理が進められた。

(138頁)

そして神の崇りを機軸とした「天皇と神々の循環型祭祀体系」論の構築によって、天長・承和年間（八二四～八四七）における祭祀制の変容、貞観年間（八五九～八七六）以降の宮廷内の神祇優勢の風潮、あるいは宇多天皇の每朝神拝制、大神宝使制、神社臨時祭など「平安祭祀性の諸制度の骨格」の確立が明らかにされるのである。それは第二部「杵築大社と宇佐八幡宮、祭祀制の展開」の所論で具体的に追及されることになる。

しかし、あらためて、岡田の祭祀史研究が「崇り」という神信仰を起点に組み立てられていることは見過ごせない。「崇り」といえば、一般に災厄や怨霊といったイメージが強いが、すでに折口信夫が災厄・咎めの意味は後世的なもので、タタリの「最古の意義は、神意が現れると言ふところ」（「ほ・うら」から「ほがひ」へ）新全集4）と論じていた。そして「御体御卜」儀礼に象徴されるように、諸国の神々の崇りをその「御体」に受ける天皇とは、顕現してくる神意を身体に受感する特別な存在であったわけだ。「天皇玉体の聖性化」もまた、弘仁・天長年間に強化される（255頁）。「国家史」と不可分な祭祀史の展開は、「崇り」という信仰の内面的世界と密接にあったこと

が論じられるのである。

ここで天皇自らが祭祀者となる新嘗祭、さらに大嘗祭論へ目を向けよう（第一部第六章「大嘗祭」）。岡田は前著『大嘗祭と古代の祭祀』で、新嘗・大嘗祭をめぐる戦後歴史学のセオリーとなった岡田精司の「ニヒナメラスクニ儀礼」（服属儀礼論）を全面的に批判した。律令以前の「新嘗」では、大王家の直轄領（倭の屯田）から収穫された稲・粟が神に献上されたことを実証し、そこには地方豪族の「服属儀礼」としての性格はないこと、そして天武・持統朝以降の律令制国家の成立と対応しない即位大嘗祭は、「王権基礎の領域である畿内を出て、畿外の神郡編成と同意の臨時・斎田を設定」することで「天皇の統治と国家の領域支配」（175頁）を象徴化する儀礼へと編成されたことを明かにする。

そこで岡田が目指するのは、大嘗祭の中心儀礼「天皇の所作である神饌供進」である。天皇自らが御箸で御前の「御食薦」に置かれた御飯を枚手（皿）に盛り、これを陪膳の采女に手渡し、神座である「神食薦」に並べていく。ここで重要なのが「陪膳の采女」である。浮かび上がるのは、中心的神事に携わるのが神祇官のメンバーではなく、天皇の日常の食事を掌る「内膳司」という内廷組織に所属していたことだ。そこから次のこと

が指摘される。

日常の天皇食膳の供御と大嘗祭の祭祀奉仕役とは、連動しており、祭祀の中心的役割である神饌供進は、古くからの天皇内廷の組織が関与してきたことが、その職員構成からも、よく理解できる。(176頁)。

こうした大嘗祭の中心神事の在り方は、古代の国家機構と不可分であった。すなわち天皇直轄の内廷的な家政的組織を基礎にしつつ、外廷的な官僚組織が付加される構造をもつ国家機構である。律令制のなかに古い氏族制が温存されているという二重構造だ。そこから律令制国家の確立にもなつて成立した即位大嘗祭は、律令官人による国家的行事でありつつ、同時に、その中心に内廷組織による天皇親祭といった伝統的祭祀を「温存」した二重構造をもつことが明らかにされたのである。

さらにここから次のことが見えてくる。大嘗祭の中心神事が内膳司などの内廷組織で運営されるとき、膳部や采女たちにとつて、天皇の日常の食膳奉仕と大嘗祭の神事の奉仕は「連動」していたこと、つまり彼らにとつての天皇は、祭祀の対象の「神」でもありえたのではないか。かつて折口信夫が「大嘗祭に於け

る神と人との境は、間一髪を容れない程……」(「髯籠の話」新全集2)と述べたことは、ここにも通底しようか。

以上、本書によって達成された岡田莊司の古代祭祀研究の一端を見てきたが、それはまさしく「国家史の展開の中にも位置づけられる広義の神道史」という方法の実践にほかならなかった。とりわけ内廷祭祀・外廷祭祀の議論は、古代史研究における石母田正『日本の古代国家』(一九七二)、井上光貞『日本古代思想史の研究』(一九八二)、さらに近年の古尾谷知浩『律令国家と天皇家産機構』(一九九〇)などの「国家史」の研究動向と密接にあったことが知られるのである。

そればかりではない。岡田祭祀学が提示した「地方・地域祭祀権と天皇祭祀権との二重構造」の議論は、戦後思想界の巨人とされた吉本隆明の「アジア的支配」の理論的解明、すなわち「アジア的共同体においては、支配共同体は被支配共同体の内面に対しては、できるだけ手をつけられないことが大きな特徴」(『アジア的ということ』)、という見解と共振していくことも見えてくる。そこには政治的イデオロギーを超えた学知史の視野が広がっていく。

こうした「国家史」の研究・思想動向とともに、「天皇と神々の循環型祭祀体系」の理論が、「崇り神」という神信仰の内実

から導かれたことは重要だ。岡田が「宗教統制イデオロギー論」からは踏み込むことのできない「中世神道」の世界へと分け入ったことと、それは連動する（本書に続いて、中世神道関係の単著が刊行される予定と仄聞する）。さらに「崇り神」という宗教的情動への着目は、二〇一一年の「東日本大震災」、二〇二〇年からの「新型コロナウイルスのパンデミック」という、われわれが体験する危機の時空と密接にあった。それは本書が、文字どおり「神道」のアクチュアリティを問う一書であったことを教えてくれるだろう。

さて、ここで紙数も尽きているのだが、最後に一言、触れておきたいことがある。岡田莊司は平成度の大嘗祭に際して、当時通説となった折口信夫批判をくり広げ、孤軍奮闘した存在であったが、第一部第六章の最後に「半世紀近い、わたしの大嘗祭論を考えたとき、もう一度折口信夫大嘗祭論に戻ってきてしまおう」（192頁）という衝撃的な「告白」をしていた。折口信夫は、中世公家社会の記録から昭和三年の新聞にまで公開された「神饌供進の作法」のことを熟知していたはずなのに、なぜそれを「一蹴」して、「天皇垂」による受霊論、即神論にむかったのか。しかし「まだ回答は闇のなかにある。…」と……。おそらく本書を上梓したあと、岡田莊司はその答えを求めて「闇

のなか」に分け入っているのではないだろうか。もちろん「闇のなか」の探索は、達成された本書を引き継ぐ、われわれ自身の課題でもある。

（A5判、三五八頁、吉川弘文館、二〇二二年一月発行、定価九五〇〇円＋税）